

>> イーグル名のカメラ <<

「日本のクラシックカメラ」作成状況中間報告(その4)

日本カメラ分科会 小林昭夫



小林昭夫会員による研究発表

1. はじめに

イーグルというカメラをご存じだろうか。ほとんどの方は知らないのではないかと。

表1.イーグル名のカメラ (確認出来たカメラ)

カメラ名	実機	文献
① イーグル手提カメラ (浅沼商会)	2台	2台 (2) (6)
② イーグル (会社不明)	2台	1台 (6)
③ イーグルハンドカメラ (栗林製作所)		1台 (5)

注:()内は後述の文献番号

今回「日本のクラシックカメラ」作成にあたり、皆様から提供されたものや文献などから表1のように浅沼商会、名称不明会社そして栗林写真機製作所の3社に該当品のあることが分かった。いずれも乾板用のフォールディングカメラで、実物は僅かに4種類しか確認できず、戦後の文献で写真付きで紹介されたもの



写真1. 浅沼商会本店 (関東大震災直前)

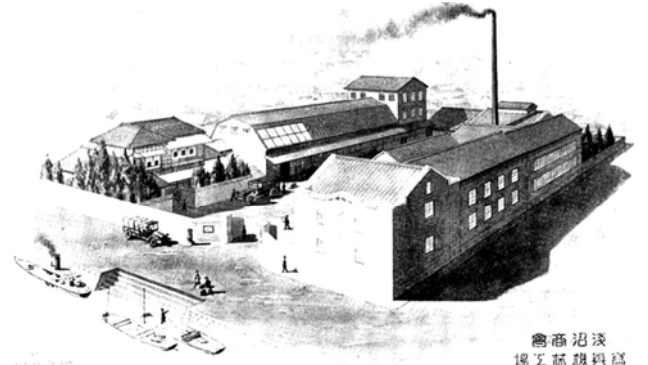


図1. 浅沼商会写真機械工場(本所、関東大震災前)

のを含めても他に2種類、戦前の広告にあるもの1種類と、個体数も含めると極めて少ないことが分かった。また浅沼商会製も含めて、発売年や由来などが良く分からなかった。

本稿はこれらのカメラについて、より詳しくご存知の方がおられたら御一報頂きたいと思ひ、カメラを紹介することにした。

2. イーグル手提カメラ(浅沼商会)

2.1 会員所有機

浅沼商会(写真1および図1:大正12年6月発行の写真機械材料目録より)は、明治4(1871)年に東京日本橋で浅沼商店名で開業した日本最初の写真機材販売会社である。また明治9年に小西屋六兵衛店(明治6年から写真材料の販売を始めた)から独立した小西本店が、同所から一軒おいた場所に写真材料専門店を開業した。両社は、戦前の日本における写真分野の発展に大きく貢献した会社である。なお写真1の本店と図1の工場はこの目録発行3か月後の9月に関東大震災により焼失した。

カメラにおいては小西六が携帯用組立暗函(フィールドカメラ)から手提カメラ(小型の汎用カメラ)へと製品を移していったのに対して、浅沼商会は図2に示すように写場暗函と称する写真館などで使う大型の暗函や写真2に示す浅沼感謝号などで代表される携帯用組立暗函の製造販売に力を置き、汎用カメラは主に輸入品を販売していた。その結果戦前の浅沼商会が製造した汎用カメラは、本稿

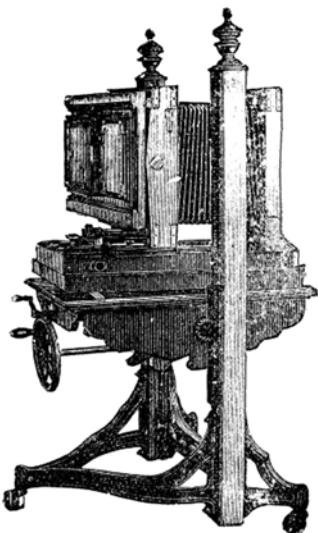


図2. 写場暗函例(写真館などプロ用)



写真2. 丙号薄型携帯用暗函(浅沼感謝号)キャビネ判、三段伸ばし。大正10年。(増野茂会員所有)



←写真4.
No.1イーグル
の鳥居部分

写真3→
No.1イーグル
8×10.5cm判(二段伸
ばし)。木製の鳥居や
ベースボードは漆塗り

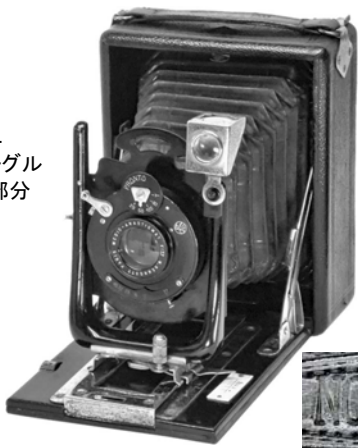


表2. No.1イーグルの諸元

画面サイズ	8×10.5cm 手札判
蛇腹	二段伸ばし
レンズシフト	上下のみ可能
レンズ	MEDIO-ANASTIGMAT, W. KENNGOTT PARIS, F7.7 焦点距離不明
シャッター	PRONTO, T,B,1/25~1/100秒
構造	ボディ、ベースボード共に木製 木製鳥居部、ベースボード:漆塗り
発売年	大正3(1914)年頃?



←写真5
No.1イーグルの
ストラップ部分



写真6. 廉価型イーグルカメラ
8×10.5cm(一段伸ばし、単玉付き)

表3. 廉価版イーグルカメラの諸元

画面サイズ	8×10.5cm 手札判
蛇腹	一段伸ばし
レンズシフト	上下のみ可能
レンズ	単玉 F16 焦点距離不明
シャッター	ACTUS, T,B,1/25~1/100秒
構造	ボディ、ベースボード共に木製 木製鳥居部
発売年	大正3(1914)年頃?

のイーグル手提カメラとクラップカメラのフォーカルハッピーに留まるようだ。

写真3は大正3(1914)年頃にNo.1イーグルとして発売された8×10.5cm手札判の手提カメラで、表2にその諸元を示す。また写真4に鳥居周辺部を示す。ボディはベースボードを含めて木製で、二段伸ばしの蛇腹とピントガラスおよび反射ファインダーが付く。ピント合わせはラックアンドピニオン機構で鳥居を前後に移動させる。木製の鳥居には赤紫の漆が塗られており、ベースボードにも漆が塗られている。レンズシフトは上下だけ可能で、鳥居後部に金属のガイドが付けられている。また革のストラップには写真5のようにNo.1 EAGLEの表示がある。

写真6は同じ大正3年頃に発売された手札判の廉価型イーグル手提カメラで、佐野守男会員の所有機である。表3にその諸元を示す。写真7に示す銘板にはEAGLE CAMERAとASANUMA & Co. TOKYOの表示がある。蛇腹は一段伸ばしでピントガラスと反射ファインダーが付く。ピント調整は距離目盛付きでレンズボードを手送りで移動させて行う。レンズは単玉で絞り調整はできない。本機はNo.1 Eagleと木製ボディやレンズボードの形が同じである。

これら2台のカメラを紹介した文献は見つけ

ることができず、発売年の大正3年頃というのは推定である。図3は浅沼商会が大正3(1914)年に発行した「写真機械材料目録」(以下目録と書く)に掲載されたイーグル手提カメラの記事である。このカメラの鳥居部は「また鏡玉を装置すべき座金の支持機は金属製のU字型にして外国製の最良のカメラに比し毫も遜色なし」と書かれており、今回紹介のカメラはこの年度のイーグルではないことが分かる。

図4は図3のカメラ部分を拡大したものである。この記事内には手札判、二枚掛け、キャビネ判が紹介されており、いずれも二段伸ばしであることが書かれている。ただし「特に初歩娯楽用として廉價なる手札判手提カメラを作製しご用命に應ず」と書かれ最後にそれが「一段伸ばし」であることが書かれている。図4のカメラは写真6とは異なるものの明らかに一段伸ばしであり、ここに書かれた廉価型であることが分かる。

図6は大正12年の1月に発行されたThe Asanuma Times(矢澤征一郎会員所蔵)に記載されたイーグルカメラの記事である。図7は



写真7 廉価型イーグルカメラの銘板

カメラの部分を拡大したものである。画質が悪いがベースボードを含めた木製ボディ機で二段伸ばしであることが分かる。

図8は大正12年6月発行の目録におけるイーグルカメラの記事で、図9はそれを拡大した8×10.5cm手札判カメラである。このカメラは説明がないものの図7とは異なり、鳥居部がレンズシフトのできる細い金属で作られていることが明らかである。またラックアンドピニオン式の二段伸ばし機でもある。

図6と図8の記事は発行に5か月の差があり、この間に鳥居のデザインが変わった可能性がある。また廉価版の記事は無くこのころには製造されなかったようだ。

筆者は上記以外に昭和4(1929)年発行の目録を所有しているが、これにはイーグルの

Eagle Camera.

○整層が多年の経験により舶来品の長所を取り短所を改め製造せるものにして體裁優美堅牢なること之右に出づるものなし用材は最良にして狂ひを生ずることなしまた鏡玉を装置すべき座金の支持機は金属製のU字形にして外國製の最良のカメラに比し毫も遜色なし

【四一十九第】

外製鋼の最良のカメラに比し毫も遜色なし

なほ左記定價表中に記載せる以外にガラス板成は他の真レンズ板の取付自在にして、ガラス板も亦コイルシヤッターもコンパウンドシヤッターも亦

代價

手札判 金七拾八圓

二枚掛 金六拾五圓

キャビネ判 金五拾五圓

手札判 金九圓五拾錢

二枚掛 金九圓五拾錢

キャビネ判 金九圓五拾錢

右いづれも二段伸ばし

図3. イーグル手提カメラの記事
(大正3年写真機械材料目録より)

図5 レンズ部拡大

図4 図3中のカメラ部を拡大したもの

（右いづれも二段伸ばし）

図7 図6中のカメラ部を拡大したもの

図浅沼工場製イーグルカメラ (名刺判) (乾板専用)

A 號 (二段伸) 單玉 付 金九圓五拾錢

B 號 (一段伸) 同 自動シヤッター付 金拾 參 圓

C 號 (二段伸) 同 自動シヤッター付 金拾 九 圓

スハシヤール號 (二段引) 復玉 自動シヤッター付 金參 拾 貳 圓

四種共兩面取替三枚付 レリーズナシ

重量六拾五匁 容積三寸八分×一寸三分×二寸八分

全上 用靴 黒革製 上製 金四圓五拾錢

同 (手札判) 特製二段引 (乾板及ヒルムパツク用)

エキストラトリボット、アブラナット等

手札形用靴 黒革製 上製 金八圓 特製 金九圓五拾錢

重畳百五拾匁 容積四寸八分×三寸七分×一寸七分

付兩面取替三枚付 金六拾五圓

付一個金拾圓

図6 イーグルカメラの記事
(The Asanuma Times, 大正12年1月、
矢澤征一郎会員所蔵)

○ 弊工場が多年の経験により、舶來品の技術を取り、短所を改良して、初歩家のために製造せるものなれば、取扱ひ簡單にして、堅牢なること他に比類あらず。器體は極めて軽く、乾燥する良材を用ひ、上質皮張りにて更に圧力を加へ、生ずることなく、頗る優美なり。名刺判 A 號及び B 號は一段伸縮、ナレども、名刺判 B 號は手札判カメラと異なり、一段伸縮の代りに、脚に記録せる代りに、外にゴルト鏡玉、メーヤー鏡玉の如き修良なるレンズ或はコパリの等の高速度シャッターを装置することを得べし、技に備けたるは手札判カメラを撮影の位置に開きたる圖面なり。



（圖八九第）

● イーグル、手提カメラ

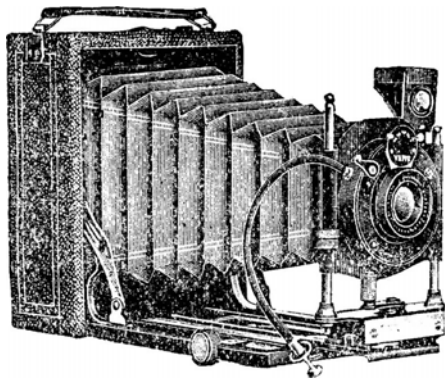


図9 図8のカメラの図を拡大したもの (8×10.5cm二段伸ばし)



写真10 会社不明イーグル5×8cm判 (6.5×9cm判と相似型)

イーグルカメラ代價表 (乾板専用)

名刺判	單鏡玉	金	銀	銅
A 號	同	九	五	拾
B 號	同	拾	五	拾
（各號とも兩面取替個仕納す）				
名刺判用黒皮箱		金	四	圓
金銀製二段伸三脚		金	三	圓
高三分八分幅二寸八分厚一寸三分		金	三	圓
手札判		金	四	圓
ケンウッド、ラビリア、アラバット、ゴルト鏡玉		金	五	圓
パリオ百分のシャッター付		金	五	圓
兩面取替三脚付		金	七	圓
フィルムバッチ一個		金	五	圓
並製黒革鞆		金	五	圓
上製黒革鞆		金	九	圓
金銀製四段伸三脚		金	八	圓
手札判カメラ字樣		金	五	圓
高四寸八分幅三寸七分厚一寸七分		金	八	圓

図8 イーグル手提カメラの記事 (大正12年6月写真機械材料目録より)

記事がなく、それ以前にこれらのカメラは製造中止されたと思われる。

2.2 会員所有機以外

図9のカメラを所有する会員はいなかったが、国産カメラ図鑑1985、1995には掲載されている。レンズやシャッターは目録中に書かれたものとは異なっているが、目録中にも書かれているように色々なものが取り付け可能であったのだろう。

ところでこのカメラの名称は目録にあるように日本語ではイーグル手提カメラあるいはイーグルカメラ、英語ではEagle Cameraが正しい。しかし国産カメラ図鑑ではEagle Hand Cameraと書かれ、この記述をもとにしたと思われるMcKeown's Cameras 2005-2006でもEagle Hand Cameraと書かれている。これらは誤りでありHandを除かなくてはならない。

3. 会社不明イーグル

写真8は6.5×9cm大名刺判のイーグルで表4にその諸元を示す。ベースボードを含めてボディは木製で蛇腹は一段伸ばしである。



写真9 写真8のシャッター部拡大

写真8 会社不明イーグル6.5×9cm判 (木製ボディ、一段伸ばし)

また写真10は5×8cm名刺判のイーグルでその諸元を表5に示す。両者は相似型でその差はレンズボードを引き出すレール幅が違うだけである。また国産カメラ図鑑にも4×6cm判のものが暗室不要フィルムを使用できるものとして掲載されており、会社名や発売年は不明になっている。

これらのカメラは浅沼商会製とはっきり分かっている前述のものとは違い、資料を発見できず由来が不明である。しかし次のような理由から浅沼商会製ではないかと思われる。

理由の①は浅沼商会が製造販売していたカメラのイーグル名を他社が簡単に使うとは考えられないことである。

②はEAGLEの表示法が浅沼製のカメラと良く似ていることである。図5(2頁参照)は大正3年発行の目録に手札判廉価型として掲載されたカメラのレンズ部分を拡大したものである。また写真9は写真8のシャッター部分を拡大したものである。両者にはよく似た半円状に描かれたEAGLE表示がある。

③は目録に記載された縦横の寸法が写真10のカメラとほぼ一致していることにある。図6に示した大正12年発行の目録には、名刺判の寸法として高さ三寸八分幅二寸八分厚一寸三分と書かれている。これは高さ11.5cm幅8.5cm厚さ3.9cmとなる。写真10のカメラの測定寸法は高さ11.3cm幅8.6cm厚4.5cmである。また六拾五匁と書かれた重量は244gになるが写真10のカメラはピントガラス部を除いても290gもある。すなわち縦横寸法は一致しているが、厚さおよび重量は目録の方が小さい。

この3点から実機は浅沼商会製ではあるが、厚さが大きいのでそれまで名刺判の無かった大正3年から大正12年の間に製造されたものではないかと思われる。

一方国産カメラ図鑑には4×6cm判のEagleが会社および発売年不明として記載されている。このカメラは日中装填および暗室なしに

現像のできるフィルムを使用すると書かれている。写真からは前述の写真8や10とデザインは似ているが、ベースボードは木製ではなく金属製と推定できるので、写真8や10よりも新しいと考えられる。東郷堂が日中装填・暗室不要フィルムを発売したのは昭和5(1930)年なので、このカメラはそれ以後の発売と考えられる。

その他昭和5(1930)年に発行された雑誌「カメラ」に栗林製作所が新発売として広告した手札判のイーグルハンドカメラがある。このカメラは実物や詳しい資料を発見できていない。このころ栗林が製造していたハンドカメラはファーストカメラとミニカメラで皆川カメラ店から広告、販売が行われていた。これらはいずれも大名刺判なのでイーグルハンドカメラは同社唯一の手札判ハンドカメラとなる。デザインはミニカメラからワイアフレームファインダーを除いたものに近い。

この時の広告には一眼レフのスピードレフレックスも出ており、三栄堂ではなく自社販売にしたようだ。

4. 皆様へのお願い

このように今回紹介したカメラは色々となかなか多いので、実物やここに述べた以外の資料をお持ちの会員がおられたら是非小林まで連絡して頂くようお願いいたします。

表4. イーグル大名刺判の諸元

画面サイズ	6.5×9cm 大名刺判
蛇腹	一段伸ばし
レンズシフト	できない
レンズ	複玉 F8 焦点距離不明
シャッター	SPECIAL SHUTTER T.B.1/25~1/100秒
構造	ボディ(本革張り)、ベースボードともに木製
発売年	大正10(1921)年頃

参考文献
 (1) 写真機械材料目録: 大正3(1914)年3月、浅沼商会
 (2) The Asanuma Times: 大正12(1923)年1月、浅沼商会
 (3) 写真機械材料目録: 大正12(1923)年6月、浅沼商会
 (4) 写真機械材料目録: 昭和4(1929)年11月、浅沼商会
 (5) 雑誌「カメラ」: 昭和5(1930)年、アルス
 (6) 国産カメラ図鑑: 1985年および1995年改訂版、スギヤマ工房
 (7) McKeown's Price Guide to Antique and Classic Cameras, 2005-2006